

エレミヤ書24章「我々の幸いと神の幸い」

1A 我々の幸い

1B 人との比較

2B 現状維持

3B 近視眼

2A 神の幸い

1B 主権への服従

2B 長期的視野

3B 恒久的結果

4B 神を知る

本文

エレミヤ書 24 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びはエレミヤ書 23 章まで来ていますが、午後には 24 章から 27 章まで見ていきたいと思えます。今朝は、24 章全体を眺めます。

1 バビロンの王ネブカデレザルが、エホヤキムの子、ユダの王エコヌヤと、ユダのつかさたちや、職人や、鍛冶屋をエルサレムから捕え移し、バビロンに連れて行って後、主は私に示された。見ると、主の宮の前に、二かごのいちじくが置かれている。2 一つのかごのは非常に良いいちじくで、初なりのいちじくの実のようであり、もう一つのかごのは非常に悪いいちじくで、悪くて食べられないものである。」3 そのとき、主が私に、「エレミヤ。あなたは何を見ているのか。」と言われたので、私は言った。「いちじくです。良いいちじくは非常に良く、悪いのは非常に悪く、悪くて食べられないものです。」4 すると、私に次のような主のことばがあった。5 「イスラエルの神、主は、こう仰せられる。この良いいちじくのように、わたしは、この所からカルデヤ人の地に送ったユダの捕囚の民を良いものにしようと思う。6 わたしは、良くするために彼らに目をかけて、彼らをこの国に帰らせ、彼らを建て直し、倒れないように植えて、もう引き抜かない。7 また、わたしは彼らに、わたしが主であることを知る心を与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らが心を尽くしてわたしに立ち返るからである。8 しかし、悪くて食べられないあの悪いいちじくのように、..まことに主はこう仰せられる。..わたしは、ユダの王ゼデキヤと、そのつかさたち、エルサレムの残りの者と、この国に残されている者、およびエジプトの国に住みついている者とを、このようにする。9 わたしは彼らを地のすべての王国のおののき、悩みとし、また、わたしが追い散らすすべての所で、そしり、物笑いの種、なぶりもの、のろいとする。10 わたしは彼らのうちに、剣と、ききんと、疫病を送り、彼らとその先祖に与えた地から彼らを滅ぼし尽くす。」

時は1節に書いてあるように、紀元前 597 年の第二次バビロン捕囚の直後です。エホヤキムが死に、その子エホヤキンが王になりました。ここの箇所では、「エコヌヤ」とあります。彼はたった三

カ月の統治でありました。なぜなら、すぐにネブカデネザルがやって来てエルサレムの町を包囲したからです。けれども、ヨシヤの後に出てきた最後の王たちと異なり、降伏という行動に出ました。「2列王 24:12 ユダの王エホヤキンは、その母や、家来たちや、高官たち、宦官たちといっしょにバビロンの王に降伏したので、バビロンの王は彼を捕虜にした。これはネブカデネザルの治世の第八年であった。」彼の父エホヤキムはバビロンの王に反逆しました。彼の後、おじのゼデキヤもバビロンに反逆します。けれども、彼は降伏したのです。それで捕え移されていきます。

その後、主の宮の前で、幻の主はエレミヤに見せられます。二籠のいちじくですね。日本でもいちじくは売られていますが、イスラエルでは主要な果物の一つです。その実は「初なり」のものが一番おいしいと言われています。八月にも実を取ることができますが、それよりも六月下旬にできる初なりのものが最も甘く、おいしいのだそうです。そしていちじくのもう一つの特徴は「すぐに悪くなる」ことです。すぐに腐ってしまいます。この二つのいちじくをエレミヤは見たこととなります。そこで主は、エレミヤにこの幻の意味をお見せになります。初めの甘いいちじくは、バビロンに捕え移された人々です。彼らは幸いを得、七十年の後に帰還することができます。

後の駄目になってしまっているいちじくは、第三次バビロン捕囚の人々です。586年に起こりますが、エルサレムがバビロンに包囲された時に、飢餓状態に陥り、疫病がはびこり、そして攻め入られた時は無残に虐殺されました。そして残された民も悲惨な形で捕え移されます。ゼデキヤは、自分の目の前で息子たちを殺され、そして目を抉り取られました。それは、彼が肉眼で見た最後の映像が、最も辛いものにするためです。そして青銅のかせをかけられ、バビロンで死ぬまで幽閉されていました。

1A 我々の幸い

けれども、ここで、捕え移された者たちと、エルサレムに残留している者たちのどちらが幸いに「見える」かを考えてみましょう。いちじくのかごの幻の中で、捕囚の身となってしまった人々が悪いいちじくで、残っているエルサレムの住民が良いいちじくと見えませんか？まさか、捕え移されることが幸いなどと、人間的にはだれも幸いだと思いません。それは屈辱的なこと、国民的悲劇であるはずで、そして残った人たちは、「悲惨から免れることができた」と思うはずで、しかし、主は正反対の適用を行なわれたのです。事実、結果は正反対であり、私たちが幸いだと考えることが災いであり、自分たちが災いだと考えるものが幸いであったのです。

1B 人との比較

ここに、私たち人間の中に潜む、自己中心的な思いを見ます。私たちが幸せだ、幸運だと思うのは、他者との比較によってです。誰かに不幸なことが起こると、「私はそんな不幸にならずに助かった」と思うのです。自分さえ良ければよいと思っています。その悲劇を眺めて、自分は幸せだと確認するのです。

新約時代においても、ユダヤ人は異邦人の支配を受けていました。ローマ帝国に支配されていました。ローマは、異教を奉じており、その多神教をユダヤ社会の中に持ち込もうとしましたが、ユダヤ人たちは猛烈に反対し、その衝突が絶えず起こっていました。その中で、ローマ総督ピラトがガリラヤのユダヤ人たちに残虐なことを行ないました。なんと、彼らがエルサレムでいけにえを捧げる時に、鎮圧して殺したガリラヤ人たちの血も混ぜたというのです。ルカ 13 章を読みます、「13:1-5 ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜたというのである。イエスは彼らに答えて言われた。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

イエス様は、ピラトに無残に殺された人々、またシロアムの塔が倒れた時に死んだ人々のことを語られています。「良かった、彼らは神の裁きを受けたのだらうけれども、私たちは免れることができた。」と思っているであろう者たちに、主は、「あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」と言われるのです。私たちは、どうでしょうか？世界で起こっていること、また日本国内で起こっていること、そうしたことを見て、「ああ、かわいそうだな。」と他人事のように見て、自分の生活を送っていやしないでしょうか？イエス様の言葉から、はっきり分かる神の御心があります。それは、「あなたは悔い改めなければ、同じように滅びるのです。」ということです。先に見た、エホヤキンたちが捕囚の民として連れていかれた時に、「ああ、エルサレムに残ってよかった。」と言っているようなものです。東日本大震災で津波でなくなった人々について、「なぜ、神は人が死ぬようにされたのか？」と、死んだ人たちと神さまとの関係を語るのですが、「なぜ、神は私たちが今だ残っているようにされているのか？」と問うことがないんですね。悔い改めなければ、その他人に向けている測りが、まさしく自分自身に向けられていることを知らなければなりません。

2B 現状維持

そして、エルサレムの住民にあった偽りの安心感がありました。以前、読みましたが、「ここにいれば大丈夫」というものでした。「『これは主の宮、主の宮、主の宮だ。』と言っている偽りのことばを信頼してはならない。(エレミヤ 7:4)」とエレミヤが叫んだように、主の宮があることによって、ここにいることは安心する、主がおられるのだという安心感があったのだと思います。ですから、現状維持さえしていれば、私たちは幸せだと思っていたのです。しかし、エレミヤは、それは偽りの安心感であると言っていました。主が命じられていることを行なっているのであれば、ここにあなたがたをとしえまで住ませよう、という主の言葉を伝えました。

私たちは、今ある既存の制度に頼っていれば、それで幸せだと思ってしまっていていやしないでしょうか？主が語られていることがあって、それに従うことによって、初めてそこに主がおられ、主が守っ

てくださるのに、いつまでもその形や制度の中に留まりつづけることによって安心を得ようとしていないでしょうか？それはあたかも、エルサレムに留まり続ける、それ以外の動きには私は乗りませんと言っている、残留のエルサレムの住民のようであります。

ローマの支配下にあった、ユダヤ人の宗教指導者たちは、いかにローマとの折り合いをつけて神殿を守るかに政治的に苦心していました。そして、そのような政治的計算が、イエス様を殺す判断へとつながっています。「ヨハネ 11:47-50 そこで、祭司長とパリサイ人たちは議会を召集して言った。「われわれは何をしているのか。あの人が多くのおしるしを行なっているというのに。もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。」しかし、彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは全然何もわかっていない。ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が滅びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考えに入れていない。」ユダヤ人たちがイエスについていったら、ローマによってこの動きは危険だということで、土地も国民も奪われるようになるから、だから、一人の人を滅ぼすことで、国民を救おうという政治判断でした。

しかし、政治判断によって平和を保つことはできません。平和は心の一新によってもたらされるものです。イエス様の弟子たちはむしろ、ローマに反抗するように教えられておらず、カエザルはカエザルに返しなさいと言われたように、ローマに齒向かうことは戒められていました。そして、神に敵対する心を悔い改め、御霊によって変えられていました。しかし、不信者のユダヤ人たちは後に、ローマに反乱し、そして紀元 70 年にエルサレムはローマに破壊されて、殺されて、捕虜として連れて行かれます。祭司長たちは、自分たちの生活は安泰だと思っていました。まさか、ローマが自分たちを潰しにかかるとは思ってもみませんでした。現状維持を最優先にしてきたからです。それで、イエスを殺しさえしたのです。しかし、自分たちが維持しようと思ってしたことが、かえって自分たちを滅ぼすことになりました。

3B 近視眼

そして、私たちの考える幸いは、とても近視眼であることを知らないといけません。たった今、目の前に見えるものが幸せそうに見えたら、それが幸いであるとしてしまっていることです。この後に残されたゼカリヤ王は、エレミヤの預言の言葉を聞いていたにも関わらず、預言者を敬っているように見せながら、結局は聞き従っていませんでした。それは、聞いてしまったら自分のそばにいるユダヤ人たちが、自分を殺すのではないかと恐れたのです。それで、目の前にあることを優先させたために、自分の目が抉り取られる、つまり何も見えなくさせられました。

ペテロは、聖徒たちに霊的に成長することを勧めながら、近視眼にならないように戒めました。「2ペテロ 1:5-9 こういうわけですから、あなたがたは、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛

を加えなさい。これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストを知る点で、役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありません。これらを備えていない者は、近視眼であり、盲目であって、自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまったのです。」

2A 神の幸い

では、次に良いもの、いちじくの良い実を見ていきましょう。

1B 主権への服従

先ほども言及したように、エホヤキンたちはバビロンに対して降伏しました。ゼカリヤに対して、後に、「21:9 出て、あなたがたを囲んでいるカルデヤ人にくだる者は、生きて、そのいのちは彼の分捕り物となる。」とエレミヤは預言しますが、バビロンを送ったのは紛れもなく主ご自身であります。したがって、バビロンに服することは、すなわち神ご自身に服することです。

私たちにとって、すべての道に主を認めること、そこに神がおられることを認めることは、幸せな道であることを知る必要があります。それが、自分にとって望ましいと思えないものであっても、自分の好みでなかったり、また自分の願っているような状況でなくても、それでも主がそうされているというところに留まっていることほど、幸せなことはありません。「1ペテロ 5:6-7 ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高してくださるためです。あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」力強い御手というのが、神の主権です。その中にへりくだって、それで思い煩いを神に任せれば、主がそこに幸いな道を置いておられます。

バビロンに服することは、とてつもなく信仰を要することでした。一つは、恐れです。バビロンが、征服した捕虜たちに何をするのかを恐れるのは当然のことです。バビロン捕囚の後に、僅かに残ったユダヤ人が、エジプトに逃げてしまいますが、それでもバビロンがエジプトに下ってきて攻めていくという出来事が後で起こります。このように、恐れているものは、かえってその恐れていることが自分に付いてくることになります。「箴言 29:25 人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。」

そしてもう一つは、「バビロンのほうが悪いのに・・・」という思いがあったことでしょう。ユダは罪を犯していましたが、バビロンの悪に比べれば微々たるものでした。しかし神は、ユダよりもっと悪いバビロンによって、ユダの悪を裁くことに決めておられました。預言者ハバククがそのことが理解できなくて、主に訴えています。「1:13 悪者が自分より正しい者をのみこむとき、なぜ黙っておられるのですか。」私たちは、何か悪いことが起こる時に、そこには神がおられないと決め込みます。神が全てを支配されていることを忘れて、「これは神がなされているはずがない。」と思います。しかし、ヨセフのことを思い出してください、兄たちの悪は悪でありました。彼らがヨセフをエジプトに売

ったのは紛れもなく悪でした。しかし、神はそれをヤコブの家を救う計画の一部としておられました。したがって、神がヨセフをまずエジプトに遣わしたと彼は告白したのです。彼は神の主権の中に服従しました。これが、幸いな道です。

2B 長期的視野

そして良いいちじくの実は、長期的な視野に立っています。「6 わたしは、良くするために彼らに目をかけて、彼らをこの国に帰らせ、彼らを建て直し、倒れないように植えて、もう引き抜かない。」と主は言われていますが、バビロンに捕え移されてから七十年も後に起こる良い結果について話しておられます。まさか自分たちが、その遠い将来においてそのような幸せが訪れるとは思っていません。悪い実は、今、目の前に見えることについて良いと思ったことを行なうことですが、良い実は後にもたらすものについて考えます。主が私たちに訓練する時、そうなのです。「ヘブル 12:11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」

私たちは、いつも霊的な眼鏡をかけていないといけませんね。近視の人たちが眼鏡によって遠くを眺めるように、霊的にも眼鏡をかけて遠くを見つめる必要があります。どうしても、目の前に見える幸せを見てしまいます。しかし、イエス様が四つの種類の土の喩えを語られた時に、良い土地に落ちた種が、三十倍、六十倍、百倍の実を結ばせます。私たちはそれがずっと後になってみないと分からないのです。花を咲かせ、実を結ばせる時まで分からないのです。したがって、忍耐が必要です。いつも、主の言葉に養われ、御霊に拠り頼み、それで主がもたらしてくださる実を楽しみにしていかなければいけません。

3B 恒久的結果

そしてもう一つ、6 節には、「もう引き抜かない」という言葉を言っています。つまり、良い実とは、恒久的な結果をもたらすということです。もう二度と引き抜かれぬとの約束を受けています。帰っても、すぐに引き抜かれるようでは、繰り返しです。主は私たちに、教訓を学ぶまで、それを繰り返させることをお許しになります。悔い改めていると言いながら、悔い改めていなければ同じ過ちを繰り返します。それで、そのままにさせて私たちが本当に学ぶところまで、そのままにしておられます。けれども、どこかで学んだ時に、主の命じられていることに留まることができるのです。その時は、再び昔の自分に戻ろうとは思いません。主が恒久的にもたらしてくださる実であります。

ダビデは、このように祈りました。「詩篇 139:23-24 神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」とこしえの道であります。つまり、永遠に至るまでの道であります。私たちはこの道を歩んでいるのであり、出てきてはまた無くなるようなものに目を留めるのではなく、永久に出てくるようなものに、目を留めていきたいと思えます。

4B 神を知る

そして 7 節を見てください。「7 また、わたしは彼らに、わたしが主であることを知る心を与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らが心を尽くしてわたしに立ち返るからである。」神にとっての幸せ、その良い実は、「神を知る」ということにあります。彼らが神を知り、また神も彼らをご自分の民とするような、親密な関係を持つことができるようになります。これは何よりも、神からみた幸せであります。神を知って、また神に知られているという関係です。まさに、このために私たちは生きており、人生においてあらゆることを通して、主はご自分を私たちが知るように導いておられます。

多くの人は、現状のままでいたいと思っています。それで、聖書を読んで、神を知りたいと思っています。けれども、主が言われているところに自分を置くことによって、初めて知ることのできるイエス様があります。私が海外に宣教師として遣わされた時に、御父によって遣わされたイエス様について知りました。この方が宣教者であられるという見方は全くできていませんでした。そして日本において、初めて本格的に牧会に携わりました。すると、大牧者なるキリストのお姿が見えてきました。それまで全く知らなかったイエス様を知りました。そして教会として、みなさんと共に教会生活を歩むことによって、神がおられることの実体を知ることができています。たった独りでも神は共におられますが、共に私たちがいる時に、そこにおられる神を知ります。ただ聖書を知識として読んでいたら決して得ることのできない、神の知識を得ています。

しかし、それはすべて短期的には、良いもののように見えません。自分の得になるようなものではありません。むしろ損になっているように見えるものばかりです。ところが、自分にとって損なように見えているものところに、実に神と主イエス・キリストのお姿が鮮やかに見えてくるのです。ですから、どうか神の言われていること、御霊が心にお語りになっていることに従順でいてください。ただゆだねればよいのです、神に任せればよいのです。恐れずに出てみてください。その先には必ず幸せがあります。